

片倉佳史の台湾歴史紀行 第八回

高雄 (8) —東沙（プラタス）島の歴史



片倉 佳史（台湾在住作家）

台湾南部最大の都市である高雄市。その管轄地域は海の先にも存在している。前回、取り上げた南沙（スプラトリー）諸島に続き、今回は東沙（プラタス）島について述べてみたい。南シナ海の歴史、そして、知られざる日本との関わりについて紹介してみたい。

南シナ海の真珠と称される環礁

東沙諸島は、またの名をプラタス諸島と呼ばれる。中国大陆からはわずか 200 キロ、香港からは南東の方向約 330 キロの距離にある。島の面積はわずか 1.74 平方キロで、東側に環礁が連なっている。標高は低く、常に風波に晒されている。当然ながら、有史以来、長らく無人島だった。

ここは前回、取り上げた南沙（スプラトリー）諸島や、西沙（パラセル）諸島と同様、アジアの火種として話題になることが多い。しかし、東沙の海域は台湾（中華民国）政府の実効統治下であり、中国やベトナムからやってくる不法漁民との葛藤はあるが、現在のところ、武力衝突などは起こっていない。ただし、全域が管制区域となっているため、旅行者のみならず、一般市民も自由な渡航は認められていない。

現在、この島は中華民国政府の管轄下にあるが、終戦までは日本領だった。東沙のみならず、平田（ひらだ）諸島と呼ばれた西沙諸島、新南群島と呼ばれていた南沙諸島も日本の統治下に置かれていた。

なお、現在、西沙諸島は中国の実効統治下であり、南沙諸島は中国、台湾、ベトナム、フィリピン、マレーシア、ブルネイが領有を主張している。南沙諸島については中国と台湾、フィリピンとベトナムが分割実効統治を行っており、群島で最大の面積を誇り、唯一真水が出る太平島は台湾が統治している。



東沙島は東沙環礁と呼ばれることも多い。美しい海で知られ、息を呑むような光景に圧倒される。

「東沙」と「プラタス」

東沙島は古くからその存在が知られていた。宋国時代や元国時代にはこの海域にある島々について、その存在が知られていたようだが、確実な記録が残るのは明国時代に入ってからとなる。

具体的には、永楽帝の時代、南海遠征で知られる鄭和（ていわ）の航海図に記載が見られる。鄭和は永楽帝による積極的な対外政策の一環で、7 回の大航海を行なったが、その中でこの島の存在を確認したとされている。図中には「石星石塘」の文字があり、これが東沙島を示しているという。

この島が中国王朝の版図に組み入れられたのは清国の第 4 代皇帝・康熙帝の時代だった。そして、対外的に「東沙」の名が登場するのは第 7 代皇帝・嘉慶帝の時代で、1820 年のことだった。

1866 年には英国船が暴風雨に見舞われ、ここに避難したという記録があり、プラタス島という呼称はその際の船長の名にちなんだものとされる。ただし、これよりも前からポルトガル人やオランダ人はこの島の存在を知っており、1641 年に描かれた地図にはすでに「Plat」、「Platas」という記載が見られる。

なお、1908（明治 41）年に台湾総督府が行なった調査報告書は『プラタス島視察報告』という名になっており、東沙島とは記されていない。後述する西澤吉治に絡む事件以来、日本によって編まれた文献では「東沙島」よりも、「プラタス島」という表現をよく見かける。



島には植物が繁茂しており、林投樹や桑が多く見られる。ただし、野菜などの栽培は難しい。

日本人とアホウドリ

日本人の南シナ海進出についても述べておきたい。明治時代を迎えた頃、多くの日本人が航海に出ていた。その目的は羽毛を得ることだった。こういった「探検家」や「冒険家」は、まずは南太平洋方面、そして南シナ海方面を目指していった。南シナ海を目指す者は台湾が日本の版図に組み込まれた 1895（明治 28）年を境に一気に増えた。特に、台湾南部の高雄が港湾都市として整備されると、ここを拠点に民間人による南方進出が進んでいった。

彼らが最も熱いまなごしを向けたのは、アホウドリである。別名「信天翁」とも呼ばれ、全長 90 センチ、翼を広げると 2 メートルにもなる大型鳥である。風を利用して羽ばたかずに飛ぶという珍しい鳥で、捕獲が容易なために乱獲に遭い、絶滅してしまったところが少なくない。

東沙島についても、アホウドリの棲息する東京都八丈支庁の鳥島を開拓し、巨額の富を得ていた玉置半右衛門（たまおきはんえもん）、そして、日本最東端の地である南鳥島（マーカス島）の開

拓で知られる水谷新六が 1901（明治 34）年に東沙島付近を探検したという記録が残っている。

ちなみに玉置はこの島にアホウドリが棲息していないことを知って開拓をあきらめ、水谷はアホウドリの代わりにカツオドリ（オサ鳥）を得ようと進出したが、本格的なものではなかった。

日本との接触が始まる

日本と東沙島の接点は諸説ある。1866 年 9 月に八丈島の住民 34 名が同島に漂着し、漢人の漁船に救出され、香港経由で送還された。これが嚆矢と考えられる。

また、台湾総督府が編纂していた『台湾時報』（昭和 14 年 11 月号）によると、1902（明治 35）年、基隆にあった西澤商店（後述）に所属する船頭の吉田という人物が神戸から与那国島を経て台湾に向かう途中で台風に遭い、福州に漂着。台湾に戻ろうとしたが、再び暴風雨に遭って南シナ海に流され、たどりついたのが東沙島だった。

この時、一行は船を安定させるために船底に石を積んだのだが、その石塊が図らずも燐礬石だった。これが西澤商店の主である西澤吉治（にしざわきちじ）の探検欲を掻き立てることになったのは言うまでもあるまい。

1905（明治 38）年には貿易商社「恒信社」の長風丸が東沙島に達しており、同社は翌々年にも長風丸を東沙島に向かわせている。

続いて、1907（明治 40）年の春には先述の水谷新六が「台湾丸」という帆船に乗り、香港経由で東沙島に向かった。水谷は同年 9 月 8 日の琉球新報に、最初の探検者としてコメントを残している。それによると、1902（明治 35）年 11 月にアホウドリが群棲する島があると聞き、探検を画策した。調査の結果、下関条約で規定された台湾・澎湖地区の範囲外であり、同時にアメリカの統治下にあるフィリピンにも属さないことが判明し、探検を実行に移したという。

5 月 21 日、一行は島に到達したものの、ここ

にはアホウドリが棲息していなかった。その代わりにカツオドリが棲息することは判ったが、一行は落胆した。しかも、この時は吹き荒れた暴風雨に見舞われ、船を失ってしまう。そして、一行は無人数島に置き去りにされてしまった。

6月10日、台湾総督府は救助船「城津丸」を東沙島に派遣したが、一行はすっかり衰弱していたという。井戸を掘ったものの水質は劣悪で、無数に飛び交う海鳥は食糧にできたが、脂肪過多で下痢に苦しめられた。結局、魚と植物の芽を食べて飢えを凌いだと伝えられる。

なお、この時、漢人の漁師二人が島に立ち寄り、海人草（まくり）を採集する傍ら、タイマイ（海亀の一種）を捕獲していた。一行は彼らが造った小屋に寝泊まりし、鍋や釣り竿を借りたという。後日、水谷はその時の親切に感謝し、ブレンダー1本とパンを与えたという逸話が残る。



この一帯は暗礁が多く、「魔の海域」として知られていた。プラタス島観象台（測候所）の建設碑。台湾日日新報より。

西澤島と西澤吉治

本格的な開発が始まったのは1907（明治40）年の8月からとされている。福井県出身の南洋貿易商・西澤吉治（にしざわきちじ）がこの島に到達し、「西澤島」と命名した。

西澤は基隆を拠点としていた貿易商であり、探

検家であった。水谷は燐礬石の採掘には巨額の資本が必要なため、自身は断念するが、西澤に東沙島進出をけしかけた。二人は台北に向かい、台湾総督府殖産局長だった宮尾舜治を通じて、民政長官後藤新平と面会する。ここで実地調査と燐礬石の採掘を願い出た。その際、後藤は「清国との間に厄介な問題が生じ兼ねない」と懸念を示しながらも、「無主の地であれば、採掘を始めても問題はなかろう」と回答したという。

これを受け、西澤は事業に着手する。行動は早く、1907（明治40）年8月8日午後4時半に105名が島に向かった。各種機材や建築資材を満載した「四国丸」は途中、澎湖（ほうこ）に寄り、同月12日午前11時、東沙島に到着したとされる。

上陸は午後2時頃だったという。最初に行なったのは、長さ20メートルほどの竿を用い、日章旗を立てることだった。そして、木板に東沙島発見と探索の記録を記した碑を建てた。この時、島は「西澤島」、これに連なる環礁は「西澤礁」と命名された。

一行は宿舎の建設を行なって、島内の調査を始めた。そして、カツオドリの群棲地と燐礬石の存在を確認したほか、貝殻類の採取も行なった。

この辺りについては林四郎という人物が『まこと』（昭和12年10月1日版）に思い出話を語っている。林は島の開発に携わり、技師長を務めていた人物である。それによると、1907（明治40）年5月に小笠原と琉球で募集をかけ、労働者を連れて島に向かった。この記事では、採掘した燐礬石は高雄に運び、大日本人造肥料会社などに売り込んだという。

島には事務所や宿舎、医務室、倉庫、栈橋のほか、台車軌道（トロッコ）なども整えられていた。宿舎は木造家屋だったが、建坪100坪あまりの家屋もあった。また、地下水を得にくいということで、コンクリート製の大きな貯水塔や淡水化池まであったという。さらに自家発電施設を有し、電話なども整備されていた。

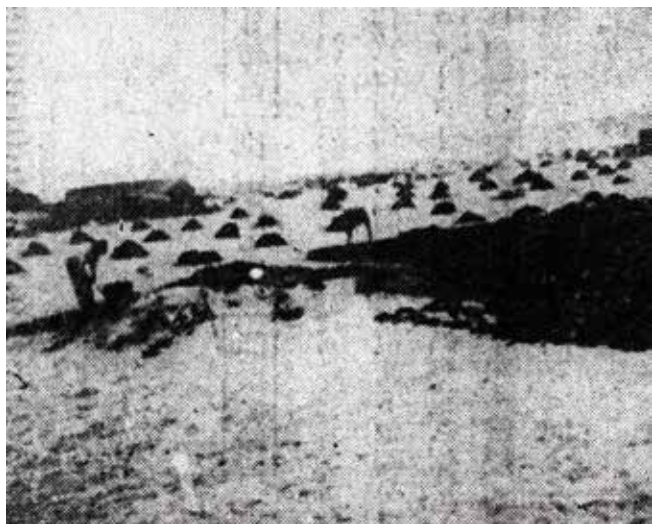
西澤島は北緯 20 度 42 分 3 秒、東経 116 度 42 分 14 秒の位置にある。典型的な熱帯性気候のため、ほぼ毎日スコールに見舞われる。夕方以降は過ごしやすく、高さ 5 メートルに満たない灌木が繁茂している。特に林投樹と桑が多かったという。

問題となったのは野菜が育たないことだった。種を蒔いても燐鉱石の多い土地では思うようには育たない。新南群島と同様、台湾島から様々な種子が持ち込まれたようだが、定着するものは少なかったようである。

一方、魚介類はとにかく豊富で、漁に長けた沖縄出身者に任せれば、一時間で 100 名分の食事がまかなえたという。同時に、海亀のタイマイも食料として重宝された。

台湾総督府が発行していた『台湾時報』には、1908（明治 41）年 6 月 16 日現在の人口が記載されている。それによれば、西澤島の人口は 424 人。内訳は内地人が 220 人、台湾人が 204 人いた（台湾にいた中国人を含む）。平均年齢は 27 歳と若かった。

大半は労働者だったが、医師が 2 名、女性が 25 名、子供が 17 名いたことも興味深い。労働者については、採掘夫のほか、農夫、漁夫、水夫、大工、左官、鍛冶屋がいた。出身地については、



鳥糞（グアノ）と燐鉱石の採掘が基幹産業だった。また、回虫の駆除薬として知られる海人草（まくり）の採取も盛んだった。



るえ見が場工に方右観外の島の時當

1907（明治 40）年 8 月 12 日、西澤は内務省に領土編入を願い出ている。台湾総督府は調査員を派遣し、実地調査をした。植物は川上瀧彌、地質は福留喜之助が担当した。衛生事情は比較的良好で、マラリアもなかった。

内地人の大半を八丈島出身者が占めていた。八丈島は西澤が初めて実業界に出た時の思い出の地である。なお、台湾人は澎湖、桃園、基隆の出身者が多かった。

西澤憲章と独自通貨の存在

西澤島は西澤吉治という人物による私有財産であり、西澤商店による「企業島」であった。

西澤はこの島で暮らすに当たっての規則を設け、住民に順守を約束させていた。島の人口は 400 名に達しており、しかも、八丈島や沖縄出身者、台湾人、そして福州出身の中国人労働者が混住していた。そして、血気盛んな男性が多いこともあって、しっかりと統率する必要があった。

これは「西澤憲章」とも言われている。台湾総督府が発行していた『台湾時報』（昭和 15 年 3 月号）によると、その内容は以下の通りである。

- (一) いかなる渡島者にも日当以外に月十円を給与する
- (二) 支払い計算は十日目ごとに行う
- (三) 喧嘩をした場合は罰金五十銭を科する
- (四) 賭博行為をした場合は罰金五銭を科する

- (五) 不明
- (六) 罰金は島民の共済に用いる。天長節、神武祭、紀元節等の祝賀に用いる。もしくは病苦者に与える
- (七) 酒は午後五時より七時まで、一人二合を限りに売る事を得る
- (八) 朝は二時に起床し、二時半に喫飯（きっぱん）のこと
- (九) 食事は毎日四度、無料にて給する
- (十) 毎晩、仕事の帰りに入浴せしめ、湯上り後、医師をして健康診断を施さしむる

これらはいずれも西澤自身が考えたものだという。労働者の健康面を考慮するのはもちろん、仲睦まじく暮らすためには、守るべきルールをしっかりと守ることが不可欠である。これは西澤自身が青年時代、近衛師団の軍属だった時代に培ったものと推測される。

また、西澤島にはこの島だけで通用する紙幣が発行されていた。これは「西澤島通用引換券」というのが正式な名前で、いわゆる「私紙幣」である。発行者は西澤商会。種類は1銭、10銭、1円、5円、10円の5種類あり、1円と5円、10円については台湾銀行券とほぼ同じ大きさだったという。

西澤島通用引換券

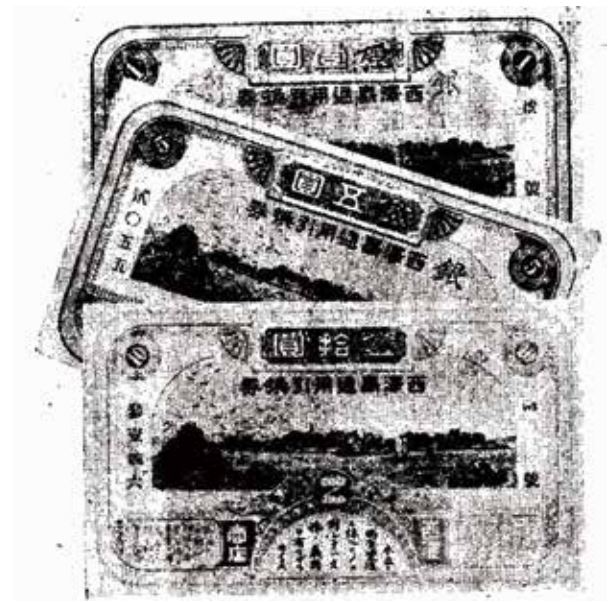
本券に依り西澤島内各販賣店に於て必要の物品と引換購入することを得るものなり

表面の金額正に相預り本券引換に基隆西澤商店にて現金相渡可申候也

本券ノ偽造變造ニ係ルモノニ對シテハ支拂ノ義務ヲ有セザルモノトス

西澤商店

なお、表面にはオサ鳥が大空を舞う様子が描かれていた。この私紙幣は西澤島が清国に明け渡されてしまった後、台湾総督府博物館に展示されたこともあったという。



西澤島には「通用券」の名で独自の通貨が発行されていた。発行者は西澤商店だった。『台湾時報』より。

西澤島の転機と終焉

西澤島の事業はおおむね順調だったが、転機は突然やってきた。それまではこの孤島にほとんど関心を示すことがなかった清国が領有権を主張し始めたのである。

1909（明治42）年3月、清国は日本に対し、同島の返還を要求してきた。そして、1908（明治41）年2月5日、マカオ沖で日本船第二辰丸が拿捕されるという事件が起きた。これに対し、日本は強硬な姿勢で清国を追究したが、これが民衆の反発を招き、大規模な日貨排斥運動へと発展した。

7ヶ月にわたる折衝が行なわれ、この島は清国領であるということで決着を見る。折からの経済不況に苦しんでいた日本は、清国との関係が悪化することを恐れ、終始弱腰だったという。結果として、清国は西澤の財産に対価を支払い、西澤は島の事業から撤退することになった。

ところで、日清両国間の折衝は西澤島の価値をどう評価するかという点が注目された。日本は実地立会臨検のため、軍艦「明石」を派遣し、これに前後して「音羽」、「鳥海」の二艦を送り込んだ。「明石」の艦長は後に総理大臣となる鈴木貫太郎

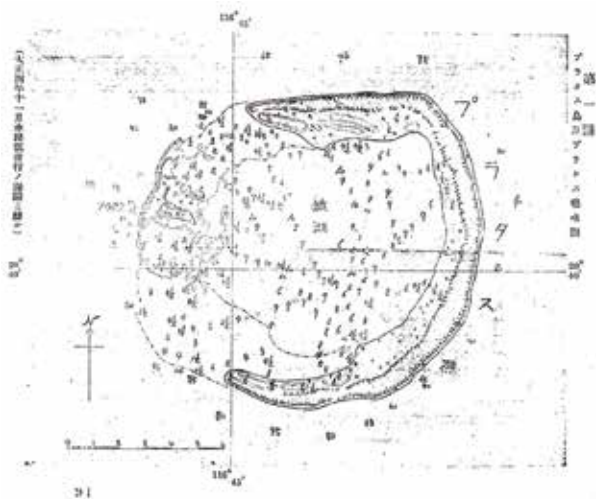
(当時は大佐) だった。

最終的に、日本側は同島の価値を 38 万円としたが、清国は 13 万元という額を譲らなかった。そして、賄賂を要求されたり、税金などを差し引かれたりして、西澤のもとに渡ったのはわずか 10 万 6 千円だったという。これは西澤が他界する前日、息子の基一によって筆記された口述覚書によるものだが、島に投じた額は 60 万円以上と言われており、さらに、浅野セメントや台湾銀行などにも 40 万円という負債があった。

なお、「音羽」の参謀は秋山真之(さねゆき)だったが、秋山は巨額の負債を背負った西澤を不憫に思ったようで、後日、ドイツ領南洋諸島を占領した際、アンガウル島の燐鉱石採掘に西澤を起用するよう、骨折りしている。



清国領になった後も海人草(まくり)の採取は日本人の手で行なわれていた。台湾との往来は盛んだった。海人草採取の組合事務所。台湾日日新報の記事より。



1917(大正6)年に描かれた地図。清国領になった後も日本との繋がりは継続された。『台湾水産雑誌』より。

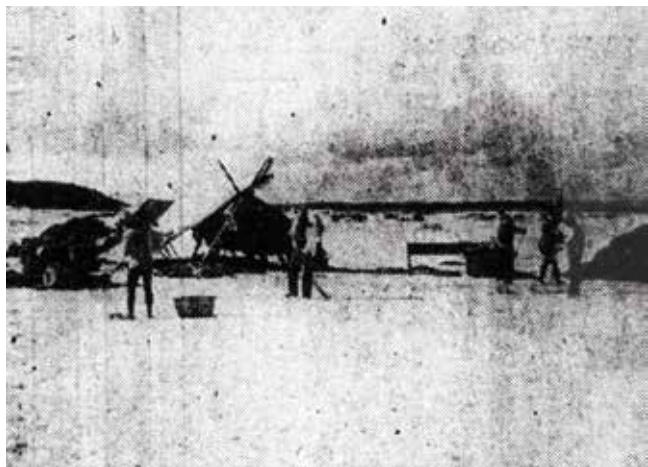
清国、そして中華民国統治下の東沙島

1909(明治42)年10月11日、東沙島は清国統治下に入った。しかし、その後の状況は何においても消極的で、芳しいものではなかった。英国香港政庁はここに通信基地を兼ねた気候観測所を置くことを清国に持ちかけたが、清国は自力で行なうとしてこれを拒否。しかし、当時の清国は財政難で、何もできないままに時間だけが過ぎていった。

また、燐鉱石の採掘についても、放置状態となり、中華民国成立後、ようやく動きが出るようになったが、西澤島時代のレベルに達することはなかった。それでも、欧米列強からの圧力もあり、気候観測所と無線通信所、灯台については整備された。この海域は暗礁が多く、魔の海域として恐れられていたので、灯台の重要性は高かった。ただし、財政難を理由に点灯されないことも多く、



西澤島は清国領となり、中華民国がそれを受け継いだ、1937(昭和12)年、日本が島を占領した。台湾日日新報の記事。



日清両国の協議で1909（明治42）年10月11日、西澤島の領有権は清国に明け渡された。西澤は大きな負債を背負うこととなった。

中華民国籍の船が航行する時だけ機能するという状態だった。

一方で、西澤島時代から絶えることなく続けられたのは海人草の採取だった。これは採取の利権を台湾にいる日本人に与え、行なわれていた。ただし、賄賂を要求してきたりすることが頻繁にあり、トラブルは絶えなかったようである。これが日本軍による占領に結びついていった。

1937（昭和12）年9月3日早朝、日本は折からの暴風雨に乗じてこの海域に入り、東沙島に上陸を果たした。そして、中国人を退去させた後、日章旗を掲げ、ここを占領した。つまり、この島は再び、日本の版図に組み込まれたのである。

それから終戦までの8年間については、史料・文献はほとんど残っていない。

西澤吉治という人物

西澤は1872（明治5）年8月15日、越前国鯖江藩の蔵役を務めた西澤為治の二男として鯖江に生まれた。若くして父と死別し、母を抱えて極貧の暮らしを強いられたが、苦学して商業学校を卒業。農商務省検査所に入り、ドイツ人技師について伊豆の温泉地帯の地質調査に当たった。しかし、21歳の頃に肺を患い、療養のために八丈島に渡る。ここで一年間ほど療養を行なった。これが後

に燐鉱石の採鉱夫の確保に繋がっている。

日清戦争が勃発すると、西澤は軍属として各地を巡る。これが台湾との接点となった。1895（明治28）年5月29日、北白川宮能久親王率いる近衛師団は台湾東北部の澳底に上陸し、台南まで行ったが、その後、西澤は基隆に住みついた。

基隆では回漕業を営み、基隆港の港湾内輸送を担っていた。同時に貿易商でもあり、探検家でもあった。

ほどなくして基隆港の築港が始まると、西澤の事業は一気に拡大した。後には浅野セメントの台湾総代理店にもなり、同社に関連した用地の買収なども行なっていた。この頃の西澤商店はまさに「朝日昇天」の勢いだった。

その後、東沙島と出会い、その開発に尽力した西澤だったが、時代の波に吞まれ、わずか3年あまりで西澤島の歴史は幕を下ろした。島を失った西澤は大きな負債を背負い、その後しばらくは神戸や東京を転々としていたという。この頃はラサ島の売却金で生活していたというが、日本海軍がドイツ領南洋諸島を占領するようになると、再び転機が訪れた。

ドイツ領南洋諸島のアンガウル島は東沙島と同様、鳥糞（グアノ）と燐鉱石で知られていた。海軍はドイツ人が行なっていた採掘事業を受け継いだ。その業者として白羽の矢が立てられたのが西澤だった。

時の海軍省軍務局長は西澤島の帰属問題に関わりのあった秋山真之。当時、西澤は困窮の極みにあったため、秋山は出資者として実業家の山本条太郎を紹介した。西澤は「南洋経営組合」を組織し、再び八丈島で採鉱夫250名を集め、再起を図ったが、これもシーメンス事件の影響で頓挫してしまふ。

西澤の晩年は寂しいものだったようだ。1933（昭和8）年8月31日、伊豆河津村にて波瀾に満ちた人生を終えた。享年62歳。まさに全力疾走を続けた人生だった。



西澤吉治氏

西澤吉治が島と絡んだのはわずか2年あまりだった。しかし、南シナ海の歴史を見る上で、不可欠な人物であるのは確かである。

現在の東沙島を訪ねる

現在、東沙島は全域が高雄市に属している。これは1939（昭和14）年に南シナ海の島々が日本統治下に入った際に高雄市へ組み込まれたため、これが戦後に台湾の統治者となった中華民国政府に受け継がれている。

敗戦によって日本は台湾・澎湖地区の領有権と請求権を放棄し、その後の管理が中華民国政府に委ねられたのは周知の事実であろう。これによって、東沙島は広東省に編入され、後に海南特別行政区に属した。そして、1949年以降は高雄市に編入され、現在に至っている。

筆者は台湾政府の計らいで東沙諸島を二度ほど訪問した。この視察は台湾政府が主催したもので、この地が自国の実効統治下にあることを外国メディアを介してアピールするべく企画されたものだった。

最初に訪れたのは2008年7月23日のことだった。これは台湾政府行政院新聞局が主催したプレスツアーで、台湾に駐在する報道関係者55名が東沙島の土を踏んだ。これは外国人として、最初の訪問団となった。



東沙飛行場の滑走路は燐礦石の採掘場跡に日本軍が整備した。現在は1550メートルに拡張されている。

国軍輸送機で東沙を目指す

記者たちが乗りこんだのは物資運搬用のC130型軍用機だった。ロッキード社製で、通称ハリキューズ（ヘラクレスの意味）。運用効率の良さと輸送量の大きさから「輸送機の最高傑作」とまで言われる機材である。現在、米軍のほか、イギリス空軍、カナダ空軍、スペイン空軍、そして、日本の航空自衛隊にも導入されている。

座席はいわゆるベンチシートで、窓枠もミニサイズ。そして何より、機内に響く轟音の大きいことに驚いた。台北から東沙までは所要約2時間。台北を出てしばらくは台湾島の西岸を南下し、新竹付近から進路を南西にとる。そして、澎湖諸島上空を過ぎた後はしばらく海上を飛ぶ。

輸送機は定刻に東沙機場（飛行場）に着陸した。滑走路は立派なものだった。この滑走路は、もと



現在、東沙島は高雄市旗津区に属する。島には行政院海岸巡防署（海上保安庁に相当）の職員など、200名あまりが暮らしている。

もと 1939（昭和 14）年に、日本が整備したものである。当時は有効長 600 メートルほどだったが、戦後に 1550 メートルに拡張されたため、往時の痕跡は残っていない。なお、この滑走路は燐鉱石の採掘場跡を整備したものである。

美しい海と手つかずの自然

この日は好天に恵まれ、カメラバックに据え付けてある温度計は 32 度を示していた。しかし、心地よい風が常に吹き付けており、気温の割には暑さは感じない。

飛行場からはバスに乗って移動したが、その車両は「高雄市公車」と記された高雄の市営バスだった。東沙島は高雄市の管轄下にあり、バス停も高雄市内で見かけるものと同じデザインである。

東沙島は平坦な島で、最高地点でも 7 メートルの高さである。地図を見ると、東西に約 2800 メートル、南北に 865 メートルほどで、中央部には大きなラグーン（潟湖）がある。干潮時の水深は 1 メートルほどとなっており、静かな水面をたたえている。

島は緑が豊富で、しかも潤いがたっぷりと感じられる熱帯性植物が多い。気候区分としては、熱帯モンスーン気候に属するが、風が常に吹き抜けているためか、過ごしやすい。ただし、台風の襲来は多く、日本統治時代の記録には、島全体が波に洗われるような状況もあったという。

小さな島ではあるが、豊かな自然生態を誇り、鬱蒼と生い茂った森がある。先にも述べたように、林投樹や桑が多く、こういった場所には昆虫が多く棲息している。また、鳥については 140 種が確認されている。かつてはカツオドリの繁殖地として知られていたが、残念ながら、これは乱獲によって絶滅している。

なお、二度目の東沙訪問となった 2010 年には、棧橋から沖合に出て環礁の周囲を航行する機会を得られた。透き通った大海原はもちろんだが、座

礁して朽ち果てた船の残骸などが遠くに見えた。風浪に晒され、強い日差しに照らされた残骸は海の蒼さの中で鈍く輝いていた。

現在、台湾政府は東沙環礁全域を国家公園（日本の国立公園に相当）に指定している。これは海洋生態の保護を目的としたもので、2007 年 11 月 17 日に告示が出されている。

これは南シナ海で覇権を狙う中国や、ベトナム、東南アジア各国に向けた台湾の戦略だった。つまり、生態保護を目的とした管理地域を設けることで、戦禍から島を切り離すことを狙ったのである。

南シナ海に海底資源が確認されるや、諸国が権益を主張し始めたのは周知の事実であろう。そして、あからさまな海洋進出を狙う中国にとって、この海域は戦略上、極めて重要な地位を占める。現在、台湾政府が実効統治しているのは東沙島と南沙諸島最大の面積を誇る太平島のみとなっているが、両者とも南シナ海の要となる存在である。



2007 年 1 月 17 日に陳水扁政権はここを「国家公園（国立公園）」に指定した。珊瑚礁や植生を研究するための施設が完成しており、常駐する研究員もいる。



東沙島唯一の廟。ここには「南海女神」と称される媽祖が祀られていた。これは形を変えて残っており、東沙大王廟と呼ばれている。現在は三国志の関羽を祀っている。



かつては高雄市が路線バスを運行していた。車両は「東沙1号」と名付けられている。2008年撮影。

島に眠っていた日本統治時代の遺物

最後に、この島で最も印象に深く刻まれたことを書き記しておきたい。

筆者は東沙島を訪れた際、ここがかつて日本の統治下に置かれていた事実を証明できるものはないか、探していた。言い換えれば、「日本統治時代の遺構のようなものは残っていないだろうか」と気にしていた。

残念ながら、二度とも自由の利かない取材旅行だったため、個人行動はできず、丹念に探し歩くことはできなかった。構造物についても、滑走路は戦後に改築されているし、測候所は日本人が設けたものだが、すでに建て直されている。家屋や石碑なども存在しない。

それでも、筆者は現地に暮らす人々に会うたびに声をかけ、そういったものが残っていないか、尋ねていた。残念ながら、筆者の期待に応えてくれるような情報は得られなかったが、台北に戻る時間が近づいていた矢先、東沙島の自然生態を案内してくれた現地スタッフが走り寄ってきた。彼は息を切らせながら、おもしろいものがあると言って、手にしたものを差し出した。

「これは日本のものでしょう？」

そう言って、彼は笑顔を見せた。

それはビール瓶であった。そこにはカタカナで「麒麟ビール」と刻み込まれていた。下には「DAINIPPON」の文字も見える。さらに、「K」と「B」を組み合わせたロゴも入っていた。戦時体制下の1943（昭和18）年、各メーカーの商標は廃止されているので、それ以前のもものと推測される。

また、四方に大海原が広がっている島なので、もしかすると、他の土地から流れ着いたものかもしれない。念のため、「このビール瓶はどこにあったのか」と尋ねてみた。すると、測候所に近い建物を改築した際、土中に埋もれていたのだという。それなら、戦前に、この島で飲まれたものと判断してよさそうだ。

筆者を乗せた輸送機は東沙島を離陸した。許可を得て、やや高い位置にある窓から島影を眺めてみた。すると息をのむような青い海が広がっていた。そして半世紀以上も眠っていた空き瓶。思わぬところで意外な遺物に巡り会い、筆者はもう一度、この島の歴史と西澤吉治に思いを巡らせた。

今後、揺れる政治状況の中で、この島がどのように存在していくのかは定かではない。しかし、美しい海原と手つかずの自然。そして、わずかな時間ではあるが、絡みのあった日本。秘境そのものとも言えるこの島だが、その魅力は決して小さくない。

取材協力；

中華民国国防部

行政院海岸巡防署

内政部營建署海洋国家公園管理處

行政院海岸巡防署南部地区巡防局東沙指揮部

行政院新聞局（当時）

陳怡如

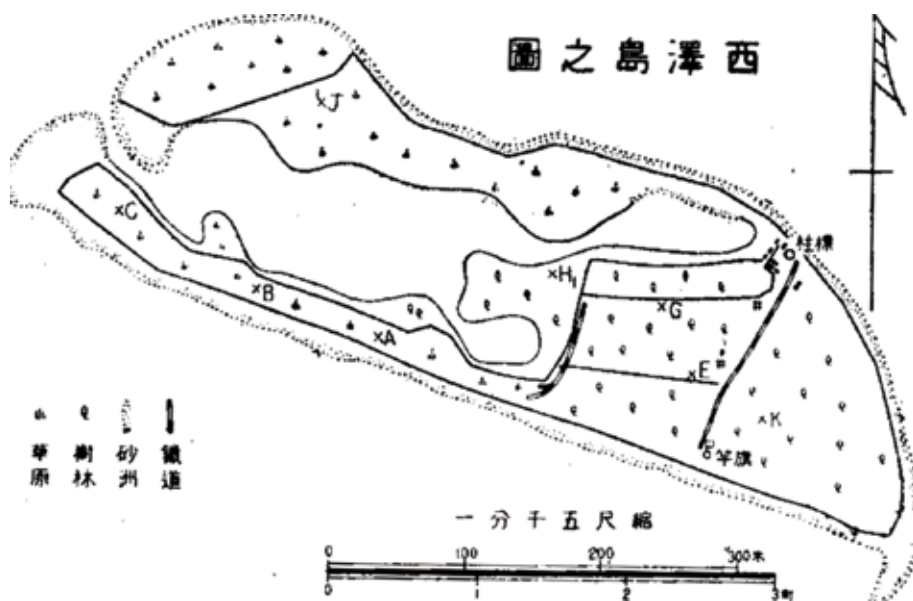
故松丸耕作



島に眠っていたキリンビールの空き瓶。後ろには「DAINIPPON」の文字があった。



東沙環礁は馬蹄形をしており、干潮時には潟湖が浮き上がる。静かな水面が印象的だ。



『台湾時報』に掲載された西澤島の概略図。運搬用に設けられた台車軌道が二路線見える。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969 年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ 40 冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに、年間 30 回程度、講演を行っている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）、『古写真が語る台湾日本統治時代の 50 年』（祥伝社）など。2012 年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がける。最新刊は台湾生活情報誌『悠遊台湾』。『観光コースでない高雄・台南編』（高文研）を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店

<http://katakura.net/>